鎖国初期のスウェーデン人たちの日本遍歴

柳　沢　重　也

序

鎖国下の日本にスウェーデン人が訪れていたとは，多くの者には信じ難いことであろうが，実際，江戸時代鎖国下の日本に何人ものスウェーデン人が来訪している。しかも，単に私人としてではなく，足跡を残しているものの多くは，“公人”としてである。このことが何故起こったかについては，ヴァイキング時代から既に見られているスウェーデン人の進取の気性や海外躍進精神と無関係ではないだろう。またその頃から培われて来たスウェーデン人の国際性のなすものだと言えよう。公人と記したが，スウェーデン王国あるいは国王の使節等として，彼等は日本を訪れたのでは勿論ない。多くがオランダの東インド会社の公人として，また幕末にはフランスからの使節団の一員として来日[注1]しているものもいる。滞在期間も比較的長い者が多く，最長の者は前後2回3年余を日本で過ごしている。

スウェーデンの史料から見て注目されることは，1667年に活字出版されたヴィルマンWillman[注2]の日本紀行は，同国でスウェーデン語で書かれ出版された時代的に最も古い出版物の中でも十指に入るとされる貴重なものである。

また，鎖国下の日本に大きな影響を及ぼした3欧人として，ケンペルKaempfer，ツンベリーThunberg，シーボルト[注3] Sieboldの名があげられるが，そのうちツンベリーはスウェーデン人である。また，他の2人はドイツ人であるが，3人を結ぶ重要な1点がある。スウェーデンのウップサラ大学の博物学教室である。ツンベリーの師としてのリンネLinné(スウェーデン語ではリネーとなる。)は知られているが，ケンペルはその師である二代続くリュードベックのうち大リュードベックOlof Rydbeckに学び，シーボルトもそこウップサラ大学に学んだものである。

さて，オランダが東インド会社を設立して東アジア進出を計ったのは，スペイン・ポルトガルが，フィリップII世の即位により統合され，それまでオランダが香料の取引先として出入りしていたリスボンから完全に占め出されたからとされる。さらにイギリスも加わって，この海上の覇権争いはし烈なものであったが，そんな状況下，東洋に出かけるものには，暴風雨などによる海難の危険と現地に蔓延していたいろいろな疫(エキ)病や伝染病の危険，そして海賊の暗躍があり，さらにこうした他国との抗争による危険，これは時には殺りく略奪事件にも発展したが，多くの者がみなこうした生命の危険にさらされながらはるばると，ジャワへ，マカオへ，台湾へそして日本へやって来たのである。

当時長い航路にでるものの多くは，“通常のもの”ではなく，社会のあぶれ者や一獲千金を狙

うものがほとんどであったとされているが，１航海百人余りの乗員の過半数が欧州にもどれなかった例は多いと言う。そんな中でおそらく名もなく東洋の海や海に散花していった無名の冒険家たちも多いことだろうが，運強く生還し，何かものが残せたこれらのスウェーデン人たちは，強運のものとも言えるだろう。またオランダ本国人より，他国の学者や冒険者たちの名が多いと言うことも，こわい者知らずの国民性と，学者や冒険家たちの間で未知への憶憬が自分の国に外国に行ける可能性がないだけオランダ本国人より一層はるかに強かったからではなかろうか。また鎖国初期のスウェーデンは，宗教戦争に端を発っした30年戦争のため，内戦とデンマークとの王位継承にからむ戦争状態にあり，そんな国内の混乱に嫌気のさした軍人や若者たちが，他ヨーロッパの国々に流れ，刹那的とも言える生を送る者が多かったからとも考えられる。

いずれにせよ，ヨーロッパの北辺の小国の何人ものスウェーデン人が，数少ない江戸鎖国時代の日本を伝える西欧人とは不思議な縁故である。

最初のスウェーデン人の来日

第１章―鎖国下のオランダ東インド会社

オランダ船が初めて日本に漂着したのは1600年３月関ケ原の戦いの数ケ月前であった。1603年には，通航の朱印状を家康より受け，1609年より平戸に商館を開いている。オランダの来日が比較的遅いのは，オランダが長く他国の支配下にあったこと，また1558年に起きた対スペインへの独立戦争は，81年の独立宣言を経ても，1648年のウェストファリア条約締結まで完全な決着は付かなかったこと。すなわちオランダは，スペイン・ポルトガルと長らく戦争状態にあったことであり，また，結局この独立戦争のために，東洋との香料貿易を独占していたスペイン・ポルトガルから閉め出されたのがオランダが自らアフリカ，東洋貿易に乗り出した主たる原因と言える。このことがオランダとスペイン・ポルトガルが反目関係にあり，また清教徒であったオランダの艦船が，1939年の島原の乱の際，ポルトガル・スペイン影響下のカトリック教徒主体の島原城を，平戸から出向き，砲撃した一因である。また，オランダ船にて来日した，ウィリアム・アダムス（三浦按針）が家康に重んじられるのを見て，ポルトガルはその失脚を画策したが，結果的にオランダが，唯一国，日本との通商を許

【禁教から鎖国への歩み】

1587	（天正15）	6	秀吉の禁教令（宣教師の国外追放）
1596	（慶長１）	12	サンフェリペ号事件、26聖人殉教
1612	（慶長17）	3	家康幕領に禁教令をしく
1613	（慶長18）	12	禁教令を全国に及ぼす
1616	（元和２）	8	明船の外、入港地を平戸・長崎に限る
1623	（元和９）	11	イギリス、平戸商館を閉鎖して退去
1624	（寛永１）	3	スペイン船の来航を禁ず
1630	（寛永７）	—	キリスト教関係書籍輸入の禁止
1631	（寛永８）	閏10	奉書船制度始まる
1633	（寛永10）	2	鎖国令（Ⅰ）（奉書船以外の渡航を禁ず）
1634	（寛永11）	5	鎖国令（II）、長崎に出島築造
1635	（寛永12）	5	鎖国令（III）（日本船海外渡航全面禁止）
1636	（寛永13）	5	鎖国令（IV）（ポルトガル人を出島に集む）
1637	（寛永14）	11	島原の乱起こる
1639	（寛永16）	7	鎖国令（V）（ポルトガル船来航禁止）
1641	（寛永18）	10	オランダ人を出島に集む（鎖国完成）

される一因ともなった。

しかし1641年このオランダも，平戸にあった商館を閉鎖し，長崎の出島に封じ込もれるところとなった。

1602年，イギリスの東インド会社に2年遅れて，アムステルダムにオランダ東インド会社が創設され，バタヴィアにも総督府が設けられた。オランダ東インド会社は国王から，自らの軍隊，貨幣の造へい，城かくの建造，法律，裁判権等をマゼラン海峡からアフリカ希望峰の範囲の中で行使することを許された一つの独立国とも言える機構であった。東洋でも抗争中のスペイン・ポルトガル船はもちろん，他のヨーロッパの国の所有船を見つけ次第捕かく没収したり，または，強制買い上げしながら，1600年代[注6]の半ばまでには，東洋貿易の覇権を握るところとなった。

イギリスとの関係は，共同してスペイン無敵艦隊を破るなど長く友好関係が続いたが，次第に貿易の権利争いで，仲違いの状態となり，1653年には英蘭戦争が勃発している。この結果，破れたイギリス東インド会社は主たる活動を東南アジアからインドに移すこととなった。

1638年，ポルトガル人がその妻子とともに日本より追放され，さらに島原の乱にて原城攻撃にも一役買ったオランダは，日本での大きな自由を獲得した。すなわち当時平戸にあったオランダ東インド会社の者たちは，日本人と自由に交際すること，外出，滞在中妻を娶ること等を許された。しかし，1939年から40年に商館長フランソワ・カロン F.Caron の下で行われた，平戸の商館[注7]の大改造要塞化で，幕府の不興を買い，41年には，平戸の商館を閉鎖し，長崎に移ることを余儀なくされた。長崎では，1635年ポルトガル人のために作られた出島に軟禁されるところとなった。しかもカロンは，日本を永久追放，以後，オランダ人のキャプテン（商館長）は1年交代，またオランダ人が日本語を学習すること等が禁止され，オランダ人の行動は厳しく制限監視されることとなった。また死者の土葬もこれ以後日本国土内に許されなくなり，すべて，海[注8]での水葬するべしとなった。

最初のスウェーデン人たち

最初に“公人”として日本を訪れたスウェーデン人については，現在のところ2説ある。その1人は，1947年に出島のオランダ商館長を命じられて来日した，フレデリィク，コイエート（Fredrik　Coyet）であり，もう1人は，1648年同じくオランダ出島商館長ブロックホビウス（Blockhovius）使節団の中に火器専門家として隊行したヨーアン・シェーデル（Johan Schedler）（ヨーアンはもう一つの名をユリアンという。）である。ここで問題になるのは，今回のシェーデル（オランダ語読みではスヘーデルとなる。）の訪日ではなく，ヴィルマンの日本王国略誌の第Ⅰ章「島国日本と北方蝦夷について」に見られるのところで，オランダ東インド会社は1643年，日本の北方を調査するためにバタビアから調査団としてカストリクム号[注]（Castricum）とブレスケンス号（Breskens）の2隻を送った。そのうちカスリクム号に，先のヨーアン・シェドラーが砲手として乗船していたと言うのである。これら2隻は調査とともに交易の入口を開くために各種のヨーロッパ及びインド産の珍奇な物産の見本をたくさん積み込み，多くの外

国人や器具類を乗せ，フィリピン群島ならび，日本の東方，マルコポーロのいういわゆる金銀島，さらに，タルタリア（韃靼）や，カタィヤ（契丹）の調査も命じられていた。このうち，ブレスケンス号は，北緯4度まで達したが，生鮮[注9]食料や飲料水の欠乏のため，三陸海岸の（日本の massene rike 正宗王国）の南部（南部領山田浦 Namboe）に入港した。この時上陸した船長ヘンドリック・コルネリスセン・スハーブ（Hendric Cornelissen Schaep）以下9人は捕らえられて，江戸に送られた。この中に砲手ユリアン・スヘーデル（Juliaen Schedel）の名前が載っている。（村上直治郎訳『長崎オランダ商館の日記』のエルセラックの日記の1644年2月1日の項）このユリアンと先のヨーアン・シェーデルが同一人物とする説が最近出された。このことは，尾崎義訳のヴィルマンの日本滞在記の注にも載せられているが，さらに，スウェーデン，ストックホルム大のチョー・セング・ボグ教授は「スウェーデン人の日本像の歴史的形成」(Historical formation of the Swedish image of Japan）の中で，シェドラーのクリスチャンネーム，さらに火器専門家であったこと，スウェーデンに帰国後，砲兵隊大佐 major になった経歴の相似から，シェーデル（スウェーデン戦争博物館所有のシェーデルの経歴書蘭には schedler/schädell と書かれている。）を，日本を訪れた最初のスウェーデン人とするのが有力説だとしている。1664年2月1日の時のオランダ商館長，ヤン・ファン・エルセラックの日記には，南部から送られてきたスハーブ船長以下9名のオランダ人の名前が列記してあり，その中にユリアン砲手というのが見られる。

しかし，この後しばらくして，幕府はオランダに献上品の臼砲等火器の取扱いできる専門家の派遣を再三要請を行っている。しかし，オランダ側は，現在，バタビアにも，専門家が居ないと断わっている。もし後年ユリアン・シエーデルが専門家として江戸に半年以上も滞在し，大器の取扱いのデモンストレーションを行っていることを考えると，同一人物としては不可解なことと言える。旦，スエーデン語ではシェーデル，オランダ語ではスヘーデルと発音される

また，後にバタビアで出会う同国人コイエットやヴィルマンにもそのことをもらしていないので，このことは信ぴょう性に欠けるとも言えるのではないか。いずれにせよ，今後もっと資料の発掘が必要である。また一方，ヴィルマンの著書にもでて来るが，ヴィルマンの到着した1647年，バタビアには24人のスウェーデン人がいたし，東インド会社[注10]が，平戸から長崎に移動される時，平戸[注11]には，200人もの“オランダ兵”がいた。この兵とは，ヴィルマンの著書にも見られるが，食いつめて，強制的に連れて来られた外国人もたくさんいたし，また捕獲された他国の船の乗組員だったものもあるのであるから，名もないスウェーデン人がこれら大量のオランダ人，あるいはそれより時代をさか上るイギリス人・ポルトガル人・スペイン人等の来日の中に混ざっていた確立は非常に高い。したがってここでは，あくまで，確実に史実の中になんらかの足跡を残したスウェーデン人のみを取り上げることとする。シェーデル[注12]に関してはヴィルマンの日記に書きのこされているほか，経歴等についても少し判明しているが，残念ながら彼自身何も物証となるものを残していないし，書き残してもいない。また日本を訪れた最初のスカンジナビア人については，ノルウェー人[注13]ローレンス・バルトルス Laurens Bartolszoon であるとされている。ベルゲン出身のバルトルスの名前は，オランダ東インド会社の日誌に1639

年長崎平戸に来たことが記されている。すなわち，当時の商館長フランソワ・カロン Francois Caron の下で，他の北欧人に見られるよう優秀な火器専門家として働いていたと言う。特に将軍のために，平戸で臼砲を鋳造したこと，またアーベル・ヤンスゾーン・タスマン Abel Janszoon Tasman のエンゲル号に乗り組み，日本北部の探検調査にも参加したことは特記されることである。

フレーデリック・コイエット Frederik Coyet の生涯は，一種悲劇の人とも言えるものであった。生年は明確ではないが，1620年頃[注14]ストックホルムだと推定されている。彼の家庭は祖父の代にベルギーのブラバンド Brabant 地方から移住してきた金工師の一族で，その優れた技術で，ロシア皇帝にも取りたてられる程であったと言う。彼の長兄ペーテル・ユリアス・コイエット Peter Julius Coyet は後，スウェーデンの駐英大使となった人物で，この兄弟二人は1649年にスウェーデン国王クリスティーナ女王から貴族の称号を授けられている。さて，フレーデリック・コイエットは若い頃より，オランダ東インド会社に勤めたが，1644年には，バタビアの法務官，また44年から47年には，パタビア総督府の副商務長官となり，さらに，47～56年では，台湾の総督府の長官となっている。この間，1647年11月４日～48年11月８日，1652年11月３日～53年11月10日長崎，出島の商館長として滞在し，将軍への使節団団長となり，47年12月30日～48年１月16日，さらに53年１月15日～２月16日まで江戸に滞在している。このうち，第１回目は，江戸城に参上するも，将軍への直接の謁見かなわず，また持って行った献上品もすべて突き返されると言う，苦い体験[注15]をしている。２度目の53年には４代将軍家綱の母の死とも重なり，江戸での長滞在を余業なくされるが，２月12日幼い将軍家綱に謁見している。

第１回目のコイエットの江戸への参詣の旅は全く屈辱的なものであったと彼の日誌に書かれている。それと言うのも直接の原因は，先の1643年のブレスケンス号事件であった。幕府はこの時死罪となるべきスハープ Schaep 船長以下を特に無罪釈放とし，みやげものまで持たして時の出島の商館長ヤン・ファン・エルセラックに引き渡したのにもかかわらず，オランダ側からは，その後一向に相応な礼がなく，その事が幕府首脳陣の大きな不興を買ったのであった。また，もう一つの重大な理由は，ポルトガルがスペインより独立したのを契機に，両国間に停戦条約が結ばれたことを知った幕府は，ポルトガルとオランダが友好関係を結び，東南アジアで協調的活動をすることを恐れた。すなわち当時日本側はポルトガルを当面最大の敵としていたこともあり，幕府はポルトガルと停戦したオランダに深く失望したのだった。そして幕府は両国の締契（ていけい）を本当だと思い始めていたことであった。この件については，ヴィルマンがその『日本王国その皇帝及び政治についての略誌』(Een Kort berättelse om Kongarijket Japan, thess Kejsare och Regimente) の29章から30章にかけて詳細に述べられている。（しかし，これは全部が必ずしも史実どおりでなく，何度かのポルトガル船の来日の模様が混動されている由という指摘が，尾崎義訳『日本王国略誌』のノートにある。）

コイエット[注16]の日誌によると江戸に参府する使節コイエットと従者ヤン・ファン・ビーレン Jan van Bijlen は，和服が用いることが強要された。これは西洋人であるということを民衆に知らしめないためとされた。すなわち，大きな黒の帽子やレースの飾り付きの黒の洋装の代わりに，

和服着用を命じられ，さらに下駄も支給され，その時，日本家屋に入る際には下駄を脱ぐことまでこまごまと注意された。さらに寝具も支給された。敷布団，上掛ふとん，まくら。さらに着物やふとんは風呂敷に包み，馬の鞍の下に敷かれ，コイエットたちは，その上に乗って行かされた。これは，後のケンペルの『日本誌』に見られる江戸参府とはかなり異なったものであった。

G．ミュッレルのコイエットについての著書の中には，コイエットが，今回の参府[注17]が必ずしも失敗ではなかったと思っていたことが記されている。コイエットは幕府の怒りが形式的なものに過ぎないこと，また，ポルトガル人，スペイン人に続き，イギリス人も来日しなくなった今，日本にとってオランダ人との貿易はなくてはならないものとし，万一来日を阻止されたら，オランダは，台湾を根城に中国人にも，対日貿易を中止させることができ，そうなると，こまるのは日本人である。幕府の本音を見破っており，結局，オランダが先の10人の救命の礼を尽くしさえすれば，通商の継続は可能であるとしている。コイエットは47年11月長崎を発ってバタビアにもどっている。

コイエットの報告を受けて，オランダ東インド会社のバタビア総督府では，その対策を初めて真剣に取り組み始める。この後のオランダの対処の仕方には，ヴィルマンがその日誌にも記している。

大任を務めねばならぬ次の使節の人選にあってはいくつかのエピソード[注18]がある。いずれにしても，使節を引き受けさせようとする“高貴”な人で商人でない者は，すべて旅の大儀さとそれに伴う危険に尻ごみをしてしまい，結局病身のバタビアのラテン学校の校長であったピーテル・ブロックホビウス博士（Doktor Pieter Blockhovius）が任命された。しかも，棺桶持参の旅であった。ヴィルマンは，副使のアンドレアス・フリーシウスが大任を終えた後，往路の途中逝くなったブロックホビウスの遺骸をパルサン漬にしたまま，バタビアに持ち帰り，当地に埋葬されたとしてある。これを受けた同じ説をとる解説書が１・２見えるが，コイエットの伝記を書いたG・ミュッレルは，ブロックホビウスは，アムステルダムのラテン学校（リッセ中高等学校）の校長であり，バタビアを７月28日出航も，８月16日死亡，遺骸を見せられ，“高貴”な者の使節に満足した幕府は，特にその遺骸の埋葬を長崎の地に許可したと記している。

このブロックホビウスの使節に献上品の最新の火器の砲術をデモンストレーションし，教えるために随行したのが，先のヨーアン・シェドレル（Johan Schedler オランダ式つづり字だとシェーデルまたスヘーデルと読める。）であった。ミュッレルによると，シュドレルは江戸で砲術のデモンストレーションを行い，大変な好評を博し，乞われて６ケ月近くも滞在を延期し，砲術を教えたと言う。この好評の理由はシェドレルが商人でなく軍人であったこととミッレルは述べている。シェドレルは後，ストックホルムにもどり，軍に入り，砲兵隊の少佐（major）になっている。

こうした好感が，この後より，出島に毎年４人の青年をオランダ学を学ばせることが決まったのも，シュドレルと，もう一人同じく江戸に残り，医学を教えた衛生兵（“医師”とは日本で記された語であり，スウェーデン語では“衛生兵”と訳した方が意味が近い。ツンベリーの場

合も同様である。）のお陰とも言えよう。

ヴィルマン Willman の日本行き

1651年6月1日，アドリアン・ファン・デル・ブルグ Adrian Van der Burg が次の使節となることになったが，ヴィルマンは，7月3日の日誌に自分が侍従長[注]としてまた船中での下士官に採用されたことを記している。ヴィルマンとは，ウーロフ・エーリック・ヴィルマン（Olof Erik Willman）であり，スウェーデン語の著者『東インド・シナ及び日本への旅行』Een Reesa till Ost Indien, China och Japan 及び，『日本王国，その皇帝及び政体についての略誌』En Kort berättelse om kongarijket Japan, thess Kejsare och Regimente の著者である。

1923年版の H.Hjärne の Två svenska Japanfarare（2人のスウェーデン人日本旅行家）に詳細にヴィルマンの経歴が述べられている。それによるヴィルマンは，スウェーデン中部のヴェストマンランド地方に生まれた。生年ははっきりしていないが，幼年・中高等さらにウップサラ大学での学業を含めて1641年まで14年間習学生活を送ったとしてあるので1620年頃と指定される。そして当時30年戦争すなわち宗教戦争の中で対デンマークと戦っていた軍隊に入り，その後，デンマークを経由して，1644年オランダ東インド会社に入ったと記されている。ヴィルマンという姓は家族の姓でなく，父親は聖職者でエーリックス・マグニ（Ericus Magni）と言い，ヴィルマンの長兄は，高等学校教師を勤めた後，聖職者にもなったアンドレーアス・エーリッキ・ヴアレニウス（Andreas Erici Wallenius）であり，ヴィルマンと言うのは生来の移り気質から Willman（迷う人）と付けたと言う。

東インドから1654年帰国，翌年には海軍士官—すなわち Skepz-Capiaten（英語では Ships Captain)に任命されるが，一軍艦の艦長であった。恐らく，佐官クラスであると思われる。1658年には，カール・グスタブ，ヴランゲル艦隊（Karl Gustav Wrangel）の第1艦隊旗艦「王冠」Kronan の艦長となり，1669年以降はイギリス・ポルトガル航路の銅運航の貨物船の船長であったと言う。

戦争文書館のヴィルマンの名簿には次のように記されていた。

Willman, Olof

2/3 1655 Skeppskapten (var detta ännu 1667).

1673 Död

Okt. 1658 Kapten på viceaml skeppet Kronan (1) i la skadern af K.G. Wrangels flotta.

Dec. 1659 (Befäl för) låg med 4 skepp i korsör.

1667 Kapten på Danska Fenix (2)

Juli 1668—Apr. 69 Paå fraktresa till Lissabon

på fraktresa till London och Portugal

(Merit förteckningar (Flottan)

(KrigsArkiv) Anteckningar T-Ö

ヴィルマン　ウーロフ

1655年3月2日艦長任命

1667年にも同様

1673年　没す

1558年10月　カール・グスタフ・ヴランゲル艦隊の副旗艦クローナン（王冠）号の艦長

1659，デンマークの（フェランド島西部の町）コッシュルに4隻の軍艦の艦長として駐留

1667，デンマーク貨物船　フェニックス号の船長

1668年7月～1669年4月

リサボンまで貨物輸送

同じくロンドン及びポルトガルへの貨物輸送

経歴籍（海軍）

軍事文書館，所有

同じく戦争文書館のHjamar Börjesonの Biografiska anteckningar om officierare vid Örlogsflottan 1600－1699 （1600年から1699年の海軍の将校の経歴）には，Willmanについて次のような事項が書かれている。

“ヴィルマンが日本に滞在中，彼の国籍が発覚してしまった(それ以前彼はオランダ人として考えられていた。)時，彼は，相手方に以前より増して友好的な取扱いを受けた。そして幕閣の1人に彼は，地球儀と地図を使い，地理学について講義するよう招換された。その上，さらにロケット弾（これは一種の信号弾），城かく構築[注20]学等も講義した。

注：このロケット弾については家々を焼き払えるような弾が作れないものかと，大目付から相談をうけたことが，ヴィルマンの上司ブルグ Burg の日誌に書かれている。また，その時鉛製のさじを持参し，9連発砲の弾丸を50発造り，もう一度，連発砲の試し撃ちすることを命じている。

オランダ人はこの時弾丸を作ったのであるから，こうした道具も持参していたことがわかる。

ヴィルマンの経歴の詳細については既に尾崎義著のヴィルマン小伝があるのでこれ以上は省くことにするが，その著書に関する詳細については少しつけ加えるべき所があるのでここに記しておく。

ヴィルマンの著書については，スウェーデンの代表的な文学史の著作である E.N. Tigerstedt の Svensk Litteratur Lexikon（1963　第3版）には，その紀行文の文学として，かつ直截な観察力と表現力の簡潔さ故，読書の興味を大いにそそるものとして好評されている。また，先のイエーネ教授の著書を参照していないものでは，『人名辞典』Biografiske Lexikon (1855版)

の中では，ヴィルマンの事項に大きなスペースをさかれており，特にその中で，リンネの弟子の一人で，ツンベリーの同僚ともいえるウップサラ大学の教授でもあったサミュエル・ウードマン Samuel Ödmann（1750－1829）が，その著書の中で，ヴィルマンについて触れ，自分の研究の先導者であると讃賞し，ツンベリーが，ヴィルマンのことにその著作の中で言及しなかったのをいぶかしく思ったことを記している。ウードマンは，ヴィルマンを聖書に登場する動物等に言及している自然科学的な態度に感嘆し，ヴィルマンが単に自分の見聞や体験を語るだけでなく“科学的眼をもって観察しているとし，彼の江戸への日誌のさまざまな観察記録は当時としてはかなり優れたものと言えるとしている。尚先の『人名辞典』ではヴィルマンは来日の最初のスウェーデン人としているが，これは誤りである。またこの辞典の参考資料として，Ödmann の著書『Flockar』の他，先のより古い人名辞典，Loenbom の Anecdoter（エピソード集），Svensk skön Litterature Lexikon（スウェーデン純文学辞典）等に上げられている。これらは少なくともスウェーデンでは既に1855年以前広くヴィルマンが読まれていた証拠である。さらに1910年刊の Birger Gezelius の博士論文“Japan i västerländsk Framställning till omkring År 1700”（1700年代までの西洋の書物の中の日本）でも，ヴィルマンは大きなスペースを割いて取り上げられている。

また1907年のスウェーデン王立図書館と日本の共同作業で出された Wenckstern の『日本帝国人名辞典』Bibliography of the Japanese Empire の付録として V.Palmgren によって成された Systematic List of the litterature in Swedish Language の Early travel の頃にもヴィルマンの著作は記載されている。

1904年のスヴェンスカ・ダークブラット紙のクリスマス特集号 Vinterbloss にも，大きな紙面が割かれ，ヴィルマンとその著作が紹介されている。これらのことから見て，スウェーデン人の日本観の初期の資料として，ヴィルマンは，ヨーロッパ全体ではともかく，スウェーデン及び北欧では重要なものであったとしても問題にはなかろう。

先述したストックホルム大の Seung-bog Cho 教授は，“ヴィルマンの著者のタイトルにもでてくる peregrination（遍歴）とは，“17世紀の学問にかんする歴史の中において，キーロールを演じたものであり，外国から知識を修得することの重要な過程の一つであり，またスウェーデンのヨーロッパ化を促進したものであった。おそらく，様々な学問の中心を訪問することにより，知識を獲得するというのが‘Peregrination’の概念であったので，17世紀の日本は，何か新しい事，ユニークな事を学ぶことができる王国であり，その中心地（センター）として考えれたのでないだろうか。この心理的な態度が，ヴィルマンをして，何らの偏見なしに，自由に日本文化について観察し，叙述させたのかも知れない。ヴィルマンの日本での日記とエッセイを読むことから得られるものは，彼の著述がヨーロッパ中心主義の偏見の見られないものだと印象である”としていることも大いに注目に値する。

ヴィルマンの著作が外国に広まらなかったのは，全体にでてくる偏なまでの反オランダ観も一因かも知れない。1674年の再版では，既に多くの反オランダに関する事項がいくつか省略されている。歴史を見ると1665年～67年蘭英戦争が起こっており，スウェーデンはオランダとそ

の側に付いたデンマークとの間で，戦争状態になっている。この後，状況が変った中で，意識的にヴィルマンが取り上げられなくなったのだろうか。

さて，コイエットの第2回目[注21]の江戸参詣は1653年のことであった。1月5日江戸に到着したコイエットは，2月12日将軍に謁見する。今回は多くの家臣や僧侶が使節を見に集まっていた。喪に服していた4代将軍家綱に謁見の後，土産物を受け取って長崎に帰った。

コイエットの日本人に対する叙述は，自分の願いや気持ちがなかなか将軍＝幕府の高官に伝わらないことに対する不満，特に通訳が絶対的権力を握っていて，彼等の思うがままに動かねばならない歯がゆさを述べている。またこの当時ポルトガル語が第一国際用法であり，当初ポルトガル語の仲介を通して，日本側とオランダ側が会話していること，ポルトガル語には語学のすぐれた通訳がいるのに，オランダ語にはまだごく小数であること，また日本の蘭学が始まりつつあること，また，また，オランダとの交渉の第一目的が，医学のためであり，そのために幕府がオランダ語専門家の育成にのり出したこと等を記している。

この日誌には部落民の置かれた状況やその生活が記されている。死刑執行人として下人は，一方で，牛馬の皮革を扱うものとして社会の中で蔑視されているが，それよりももっと下の位で，蔑視されているものは，女郎屋の主人たちであると記している。貧しい婦女を搾取するものとして倫理的批判も記していることは注目される。また，女郎屋の主人は一般市民の家への出入りを許可なくすることを禁止されていること，下人よりも大衆によって軽蔑されていることを述べている。またキリスト教徒については，幕府の執拗な探索や，それによって捕まったものたちの宿命を淡々とした筆で叙述している。先のヴィルマンはオランダ人の神への非礼をはげしく批判しているのに対し，コイエット宗教観は淡泊である。これはコイエットが商人であるからだろう。

コイエットは，この後1656年台湾長官に任命されたが，ここで一大悲運に見舞われる。1664オランダ東インド会社の要塞地ゼランディア Zelandia は国姓爺率いる中国人に攻められ，降伏を余儀なくされた。

捕因ののちバダヴィアに引き渡されたコイエットは1664年裁判で，会社に対する職務怠慢および反逆行為とで，バンダ島に終身の流刑に処せられ，ここで12年間の流刑の時を過ごした。スウェーデン国王カール10世の減刑願いもあり，ようやく釈放されたがオランダに帰国した彼は，終生そこを出ることを許されず，1689年アムステルダムに没した。彼の受けた刑は，バタビア総督府が何度もの支援の願いを無視した揚句の降伏によるものであり，いわば，無実の罪ともいえるものであったが，終生回復されることはなかった。この事件についてわずか2通の匿名の論文が発表されたが，おそらく，これも彼自身の筆によるものと見られている。彼の墓地は早い時期に回葬され失われ，またスウェーデンでも，長い間忘れ去られてしまっていた。今日，ストックホルムには，国立文書館に，コイエットの長兄 Peter Julius Coyet に宛てた出島と台湾からの手紙が2通残っているのみである。コイエット事件については，オランダ語の資料文献がまだ，発表されていないものが多いと思われる。

トゥーレソンの日本への旅

アンデェシュ・トゥーレソン Anders Toresson も同じくスウェーデン人であり，ヴィルマン同様オランダ東インド会社に働いた後，“紀行文”を残している。ヴィルマンや，コイエットの時代から20年余り後の事であり，ドイツ人医師ケンペルの来日とほぼ時期を同じくする。スウェーデン中南部スモーランド地方のヴェステルヴィーク出身であった。生年は1651年であり，1709年に同地で没している。彼は1674年より，1683年まで，水夫として働いた。彼はその間バタビアを中心に航行するオランダ船に乗り組み，日本の長崎から，南アフリカの喜望峰まで縦横に航海して回った。すなわち1674年９月ストックホルム港を発ったトゥーレソンは，９年後の1683年に同国ノルシューピング港に帰着，58歳で，桶作り名人としての名を残しながら逝くなっている。

アムステルダムより出航したトゥーレソンの乗った船は南インドのマスリパータム(Masulipatam)の沖合で難破したが，幸い乗組員は，当地に上陸することができた。現地民に襲われたが，鉄砲火器のお陰で難を逃れ，後，船団の他の船に乗り組み，中国の沖合を北上，台湾を経て，長崎に到着した。そこでは銅を船に積み込んだが，銅は約30cm位の延棒に鋳られて，箱づめとなっていた。そのような事が日記文には記されている。

トゥーレソンはその後，日本から，アラビア半島を回り，ペルシャ湾に入った。後，再び東南アジアにもどり，シャムやバタビア，中国南部を航海している。その貿易には，アンボナイト島のクローブあり，アロエ諸島の硫黄あり，またマダガスカル島からは400人もの奴隷を買い込み，バダビアで売ったりしたことが記されている。

ウップサラ大学の図書館カロリーナ・レドヴイーバ Carolina Redivivaには，トゥーレソンのこの短い紀行文が，手書き原稿の形で残っている。これが，『アンデシュ・トゥーレンのヴェステルヴィークの樽作り名人の1674年から1683年の間の東アジア旅行』 Anders Toressons Tunńbindares uti Wästerwyk, Ostlndiska Resa ifrån åhr 1674 till åhr 1683 であるが，後，注釈付きでO.G.スンドベリーによって1948年に初めて，活字出版された。これは，どちらかと言うと稚掘とも言える文であるが，トゥーレソンは当時東インド会社に雇われていたごく普通のスウェーデン人の旅の見聞の印象を書き残したと言えるだろう。

彼の文の中の地名の書式は，現在のものと確証するのにひじょうに難しい，“独特”なものである。日本については，ヴィルマンやコイエットが Japon　Wippon などと書いたのに対し Japan としているが，長崎と見られる町名は，Langasettie と記している。スウェーデン人たちにとって日本的発音が非常に理解しにくかった証拠であろう。

この紀行文は，全部で活字にしたもので15ページばかりである。このうち，日本に関する主要部分は，次の通りである。

メソポタミアより，私たちは足速の航海をし，中国王国，さらに台湾島を通り過ぎながら，日本王国にやって来た。この国は，周囲を高い山々に囲まれた“高い”国である。そこには，長崎 Langasettie と呼ばれる町がある。私たちはまずそこに到着した。ここでは銅

の大きな取引が行われている。銅は，約30センチの延棒に鋳造されて箱詰めとなっている。オランダ人はここからこの銅を買い入れて行く。ここの国民の顔は色白で，非キリスト教徒である。とても怒りっぽく，(取引に関して)相手がどんなであれ信用することなく，質となるものを渡すまで，何の品物も渡してくれない。このため，私たちは，船の帆を質として渡し，すべて荷の積み込みが終わってはじめて，帆を返してもらえる。また，私たちは自分がキリスト教徒であることを示してはならない。なぜかと言うと，キリスト教徒はここでは取り引きを許可されないからである。このため私たちは船内にあるすべての礼拝や祈りの書物を榴に積めて片付けてしまうのである。この国には小判（skopangs（スコーパング））と呼ばれる貨幣がたくさんある。これは金貨であり，1枚が9リスクダーレル。(リクスダーレルはスウェーデンの古い貨幣の名前。かつては銀で造られていたが，1676年で終わり，1624年よりは，銅で作られるようになった。この場合は，銀での単位であると思われる。)日本では銅のみを積み込んだ後ペルシャ王国への逆もどりのコースを辿り，アラビア半島を通過した。ここでは，アラレット Araret と呼ばれるかなり高い山を見た。この山に，大洪水の時ノアの箱舟が停泊したと言う。

この原稿は実際にはトゥーレソン自身が書いたものではなく，他の者が聞き書きで，代書した可能性もあるとされている。

スウェーデン人たちの日本遍歴はこの後も続く。ツンベリーに前後して，“日本に来たのか，あるいは日本の近海までしか来られなかった”は不明であるが，故国の両親に宛てて92ページにわたる日本紀行記を残し，南海に散ったペーテル・サラン Peter Salan もその一人である。サランは，ウップサラ大学を出，さらに外国に留学をしたエリートであった。商務庁，貿易局，さらに法務庁の書記官を務めたのち，造幣局の書記官となるが，ここで横領事件に連鎖してしまった。裁判にかけられ，保釈中に国を出た Salan が求めた逃亡先が東インドであった。

ツンベリーは今さら書くに及ばないが，幕末の日本の見聞録を記した者には，中国に滞在したスウェーデン，ノルウェーの政府の代表者カール・フレードリック・リリイェヴァルク Carl Fredrik Liljevalch があり，彼は漂流漁民を1858年江戸に届けたイギリス船 Mercator Coopers の江戸訪問時の見聞の聞き書きを残し，その中で，今後の日本との貿易のあり方等を述べている。

また，幕末，開国後維新の混乱時にも，1人のスウェーデン人が日本を訪れ，Ett besök i Japan och Kina（日本及び中国訪問記）を1871年に著している。彼の名は，アントンベックストルーム Anton Baeckström であり，彼はフランス海軍に勤務し，1868年長崎，横浜，江戸，鎌倉，神戸，兵庫さらに大阪と回っている。ベックストルームの描く日本の歴史，文化像は，今日まだ多くの興味を引くものである。

これらいくつかの日本に関する著作が，江戸時代の日本，そして日本人全体に対する偏蔑のない日本観をスウェーデンの国民の中に植え付け，1873年，同国を訪れた岩倉使節団が，アメリカ，ロシア，以来の大歓迎を受けた下敷きとなったものと言えるだろう。当時のスウェーデ

ンが　日本がいわゆる遍歴の学問の中心であったとは，辺境の地にありながら，アイキングの時代より，進取の気性に富むスウェーデン人の国民性に他ならないだろう。

外国語参考文献

○T.J. Arne : Svenskarna i österlandet, Stockholm 1952

○John Bernström : Frederik Coyett, guvernör på Formosa 1656－62 och hans ätttlingar Personhistorisk Tidskrift 1953

○Torsten Burgman : Japanbilden i V erige 1667－1984, Uppsala 1986

○Seung-bog Cho : Historical formation of the Swedish Image of Japan, University of Stockholm, Center for Pacitic Asia Studies Working Paper 11, Oct. 1989

○Arne Forsell : Till histroien om Nils Mattsson Kiöpings och Olof Eriksson Willmans reseskildringar, Festskrift till Herbert Jacobsson 1878－1948, Göteborg 1948

○Åke Hermansson : Något om europeisk vapenteknik i 1600－talets Japan Varia Volym VII 1982

○Harald Hjärne : Två svenska Japanfarare, Stockholm 1923

○Gunnar Müllern : Förste svensken i Japan, Stockholm 1963

○Alf Persson : Fyra svenskar i Japan, Orientaliska Studier nr 16－17, 1974

○Anders Toreson : Anders Toresons Ostindiska resa 1674－1683, Stockholm 1948

○Tord Wallström : Svenska upptäckare, Stockholm 1983

○Olof Eriksson Willman - Nils Mattsson Kiöping : Een kort Beskriffning uppå Trenne Resor och peregrinationer samt Konungariket Japan…, Visingsborg 1667, 1674

○Alf Åberg : När svenskarna upptäckte världen, Lund 1981

日本語参考文献

「古文書の語る日本史」－６　所理喜夫編　筑摩書房　1989

「江戸西洋事情」　金井　圓　新人物往来社　1988

「日本の歴史－14－鎖国」　岩生成一　中央文庫　1974

「ヴィルマン日本滞在記」　尾崎義訳　雄松堂書店　1970

「長崎オランダ商館の日記」，村上直治郎訳　岩波書店　1957

「平戸オランダ商館日記」永積洋子　岩波書店　1969

「バタビ城日記」村上，中村訳　平凡社　1670

注

注１：オランダ東インド会社の雇用者としてでなく，スウェーデン人として最初に来日したスウェーデン人は，1859年に長崎に来日した，ヘルマン・モルティメル・トロチィック Herman Mortimer Trotzig (1832～1919) であると言う。この資料については，日本に最も古くから支社を開いたスウェーデンの商社ガデリウス社に保存されていたものと，ストックホルム大の Seung-bog Cho 教授はその Historical Formation of the Swedish Image of Japan に書いている。それによると，この Trotzig こそ，英人の同僚 R. Hughes とともに，1863年若き日の伊藤博文を含む５人の日本人青年の英国船での密航を助けた人と言う。Trotzig はその後神戸に移住し，警察署長等をしながら，当地で生涯を終えた。

注２：Olof Willman（1620？～1673？）。

注３：いずれもオランダ人として，長崎の出島に滞在し，“医師”として勤務した。

注４：Olof Rudbeck は２代続いてウップサラ大学の博物学教授をしており，ケンペルの師は大リュードベックすなわちＩ世の父親の方である。二人とも同名である。

注５：当時平戸のオランダ東インド商館の長だったが，フランソア・カロン（François Caron）であり，後ヨーロッパに広く読まれた『日本大王国誌』の著者である。また，後長崎のオランダ商館の館長として２度来日する Frederic Coyet の義兄でもある。Coyet の父方は３代前にベルギーからスウェーデン人移住したのであるが，Caron もベルギー人であった。Hjerne 教授によると，Coyet は Caron の義弟であり，Coyet がオランダ東インド会社で異例とも言われる出世を遂げたのも Caron のお陰と言う。しかし，バタビナの総督府の長官を務めた後カロンが失脚し，オランダに帰国したが，その後，フランスの宰相コルベールに拾われて，フランス東インド会社を起こした。このことが逆に失脚したコイエットにも逆影響を与えたという。つまり，コイエットは台湾長官として台湾のセランジア城にいた折，国姓爺に攻められ，バタビアから十分な援軍の来ないまま，降伏し，オランダ東インド会社が台湾を失う元凶を作った。この時十分な援軍を回してもらえなかったこと，さらに死刑判決の後，終身遠島流刑の重罪を受けた大きな一因がカロンの仏東インド会社での活躍にあるという。

注６：Willman はその日誌の1649年４月18日の日付に，オランダ軍船８隻がバンタム付近で２隻のジェヌア船を捕獲し，没収したこと，さらに東インドへ来航する船は，何人の所有船でもすべて没収せよとの命令がオランダ本国の東インド会社から出ていることを記している。

注７：Willman 著の『日本王国略誌』Een kort berättelse om Kongarijket Japan, thess Kejsare och Regimente の第31章にその模様が書かれている。

注８：Willman 著の上述書の32章に，出島に滞在中逝くなった及び水夫が，出島の沖合で水葬されたことが記されている。

注９：以上1970年に出版された Arnold Montaunus 著 Denckwürdige Gesandtschafften der Ost-Indischen Gesellschaft in den Vereinigten Niederländern an unterschiedliche Keyser Von Japan (Amsterdam 1669) 参証。

注10：バダビアから日本に出発する1951年７月13日の日付で，ヴィルマンの日記に同国人が24人おり，またそのうち１人は“水夫”でなく，裁判所の書記官であると記している。このことから既に前々から多くのスウェーデン人がオランダ東インド会社内のバタヒや東インドで働いていたことがたやすく伺い知れる。

注11：Willman は先述の日本王国略誌の31章でカロンが平戸の商館を取り壊した際約200人の“オランダ兵”がいたことを記している。また同じく，先に述べたオランダ軍船に捕獲されたジェノア公の船にもスウェーデン人が乗っていたことを Willman は記しているが，これら注11，12から無名のスウェーデン人が，それ以前日本に来たことは十分に可能性があると言える。

注12：ヨーアン・シェーデルは，ユリアーン・スヘーデルとして，上述の『長崎オランダ商館の日記』の中には何度とでてくるが，特に名前がはっきりでてくるのは1650年１月26日のアントニオ・ファン・ブロウクホルストの日記であり，また1950年11月14日の後任館長ピーテル・ステルテミウスの日記には，江戸に残って，幕府の命により，様々な講議を行っていた四人のオランダ人が，それぞれ将軍より，賜物を受けるが，砲手ユリアーン・スヘーデルは，スホイド銀100枚を受くとある。

注13：Gunnar Müllern 著 Förste Svensken i Japan の P27，ここにはオランダ東インド会社の1639年平戸の日誌の中に彼の名が載っていると記している。

注14：Willman 著“Een kort berättelse om Kongariket Japan…”

注15：Coyet が長崎に最初にヨンゲン・プリンス（ヤング・プリンス）号で1947年８月29日に着いたの

であるが，これは，まさにポルトガル特使，ジョゴ・デ・ソウザ・デ・メネゼスが長崎湾内に入っており，湾口の封鎖が行われているところであった。話がこじれるのは，この特使が，途中バタビアに寄り，日本に向かうため，熟練の操舵士と水夫をオランダから，借用したと述べたことから始まった。実際には，直接の援助はなかったのだが，先のエルセラック館長の時に約束したオランダ本国から，オランダ人十人の命を救われたことのお礼に来る特使がまだ参上しなかったことを不満に思った幕府側の無理難題的な理由で，コイエットは謁見を許されなかった。

注16・17：Gunnar Müllern 著 Förste Svensken i Japan の中のコイエットの日記の参照

注18：注14に同じ。

注19：ブロックホビウスの出発地について，コイエットは自分の日記（『長崎オランダ商の日記』）の1947年9月18日の中で，彼が本国から来ると書いている。また後任の商館長，ジルク・スヌークは上述の1949年9月19日の日記の中でブロックホビウスが本国より派遣された法学博士であり，わずか，14日間バタビアで休養しただけで，年齢50才近い本人が旅と気候になれず，途中，病死したと書いている。

注20：尾崎義訳『ヴィルマンの日本滞在記』の中のノートで尾崎義は Coyet の使節が失敗したため，教養人であるバタビアのラテン学校教員（実際には校長）の Blockovius が後の使節になったと記している。

追注：本文中の日付はすべて西洋暦によるものである。